き趣を述へさり○偖其應對も濟けれと使節等と各煙草道具を取り出して烟草を吸ひ拂ひ此處より暫く休息して慰みさり

偖此處より暫時休息ふしさる後使節等とマルチン并其外支配役人等の案内より つれて園庭より飼ひ置さる數多の奇獸を見んとて此處より行き獅子、虎、豹、或と象、猿其外奇鳥等を見物しさり○其外又此處より人間其外活物等を喰ふ獸をも飼ひ置きてありしゆへ日本人と頗る仰天せし模樣ふりき○然るより前より も記せし如く日本人等と和蘭人の見物より來るを甚悦へる模樣ふりし故此處よりても日本人を見物より來る者幾千萬といふ數を知らず實より一歩を進むる事も甚難義より覺へし程ふりき去れども日本人と此園庭より數百種の奇獸等を見物せし故斜ふらず悦びさり○斯て此見物も濟しし故使節等とマルチンの住家の前よりある築山より行きけれど此處より支配役人其外數多の婦女子等集り來りて使節等と共より頗る面白ろき慰みをふしさる後使節等マルチンの内室の畫きさる數多の畫ふどを見てありし内より追く時刻も移りし故一同此場を去る用意をふしさり

此の如き丁寧懇切ふる取持ふりし故上席の使節と通詞を

以て案内の人よ種〻厚き禮を述べ其外此饗應よ出さる役人總體よも宜敷く傳言し呉れよと頼みさり

偖此處より使節等又乘車よ乘りて其近邊よある問屋場の方よ行き又此場處よて暫時休息ふして使節等と饗應の役人等と互よ懇切よ暇を告け夫れより使節等一同頗る大悦せし模様よて王車よ乘りてゥ〳〵へり行きけり斯くて引車（蒸氣車の前車）よても笛を吹て日本使節鹿特堤の遊覽も全く濟さり

といふ事を知らせさり

諸處遊覽中數多の見物人日本人よ附き添ふて日本人の遊覽を祝し〻る故使節一形ふらず大悦せし模様ありき

海牙逗よ留中第六月二十一日（或五月廿四日）後の事

日本使節もボイデンホフといへる處の役所よて和蘭の外國掛り執政役と會合談話せんとて廿一日廿二日の兩日共夕方よ到りて使節其外同勢三輛の車よ乘りて此役所よ行きさり○二十一日よも使節等議政上院と議政下院（上下院共よ政事を論議する役名）の二部屋よ暫くつゝ留り居さり○使節等上院の部屋を去りて後前坐敷よて暫くの間此上院の上席ふるヒリプセといへる人と談話し此談話も程ふく濟けれも使節等も此饗應の行屆きさる禮を述へ且スウィンデレンといへる人の深切ふる口上の辱きを謝し其外向後も日本と和蘭

と益く親しく交りさき趣を述へ懇ろ暇を告げて夫より下院の部屋ゟ到りさり○此部屋ゟても國益掛りの役人使節等を招待して一ッの部屋ゟ案内し勘定掛り執政役かるベッといふ人使節等ゟ入來の挨拶をかしさり○使節等此部屋ゟ暫く留りて此諸坐敷の立方并下院の人〻の會合の様子等を聞し後又始めの如く國益方の役人ゟ誘れて此場を去りさり

又來る廿五日我五月廿八日ゟも使節同勢の内十五人之者俺奇坦アムステルダム和蘭の第一の大都但國王の居る處ゟ遠らすゟ行きて其地の表立さる場所并其近郊等をも遊覽すべしといふ話あり

又廿三日我五月廿六日ゟも外國掛り執政役ソムフレッフといふ人セーフエンケンの浴館ゟて日本人ゟ浴饗應の膳部を出さんとて其相伴の為ゟ執政役諸人饗應掛り役人並奉行物頭都府年寄役も勿論諸外國の使節をも招く筈かるよし

又近日の内日本使節等和蘭の諸部來丁亞零鳥特立痾威立ライデンアールンウトレクトオランイエ塞并利里ハリーフェ等をも遊覽すべしと云ふ話あり

又近日の内ゟ海軍掛り執政役カッテンデーケといふ人使節等を饗應せんとて既ゟ其邸宅の飾り付も勿論園庭ゟも一の美麗かる堂上を立て其内ゟて樂人組ゟ音樂を奏せしむる用意をかし居るよし

日本使節和蘭國王ゟ呈せんとて本國より齎し來りゝる品物左の如し○染めゝる日本絹十卷○無地の日本絹十卷○華麗ゟる鞍其外馬具一式○頗高價ゟる太刀二振ゟるよし殊ゟ日本ゟて斬の如き太刀を帶るゝ西洋ゟて政事軍事等ゟ大功ありて高貴の位ゟ登りし人の十字の印を付るゝ同様ゟる事のよしゟり

又日本入鳥料亞（ウトレクト）を遊覽ゟ行くときゝ其地ゟて和蘭國の貨幣を見せ並債幣の製造をも見物させ且つペンニングといふ青銅の錢ゟ日本字を打出して使節等ゟ見せんとて其用意をゟし居るゝよしゟり

海外新聞別集 九月印刷

原本ヨテルダム新聞紙第十三號（千八百六十二年第七月七日即ち文久二年壬戌六月十一日ゟり）

○日本國使節の事

日本使節我荷蘭國ゟ來り心地よしと思せんと疑を容るべらゝず勿論是まで佛蘭西英吉利ゟ於ても甚丁寧ゟる取扱を受けとり然れども荷蘭ゟ於ての取扱ゝ其親切ゟることと殊更ゟ勝れゝり

右使節の人才秀でし事と又其人々の何時何處ゟても暫の間も銘々の職務を怠らず擧動穩靜ゟる事ゟゝ衆人皆之ゟ

眼を付しあり又其下役等も諸事見聞しさる事を委しく書留め本國人民の爲め利益を取らんと思ひ間斷なく勉強せり右に付一度往きて不足ふるとあどあれば或も今一度往き度よしを乞ひ或も別人を遣しく委しくこを吟味するあり夫故使節の同勢同日に數箇に別れ諸方に分散せり假令ば本使の公用にて外出せし時も其余の者も鹿特堤の病院又もヘインノールトといふ所を見物しあどして少しも油斷せざるあり故に日本人の遊行せしことも迚も委しくこを書載すると能はず只其内の著しき遊行と格別ふる話とを纔に爰に述るあり

外國事務宰相祝宴の事

第六月二十三日（我五月二十六日）に セヘニンゲンといへる所の浴亭にて外國事務宰相ファン・デル・マエセン・デソムブレフ氏大ふる祝宴を設け日本使節に晝食を馳走せり此時邑中にも貴客尊敬の爲にとて家々に三色に染分けさる國旗を立て列らね浴亭にも日本の旗をも飜せり

立派ふる浴亭の樓上にも數多の貴客來會し食卓も善美を盡し多くの花枝を以て如何にも美麗に飾り立さり

外國事務宰相も右食卓の上席に海の方を背にして座し海邊眺望によきよふに其真向第一の日本使節松平石見守を

座せしめ其余の諸客も一統よて車座をおす右順序も外國事務宰相の右の方よ羅馬教王の使節へレオヂ左の方よ比利時國の使節巴侖ジヤルジ教王使節の次よ國事宰相某其次よ墺地利國の使節巴侖ランケナウ軍事宰相某嗹國使節ビルレブラヘ天主教事務宰相某瑞典國使節小侯爵マフニュス當村役人某他洲領事務宰相の屬役ジュルデル（日本使節饗應役）掟役巴侖ソイレン下院の紳士ビーベルステインドンクルキルシュス（饗應役）森山多吉郎柴田貞太郎刑獄事務宰相某阿諾威國使節巴侖ボデンベルフ海軍事務宰相京極能登守其次も先よ載せさる第一等の日本使節又其次よゼ子ラールマヨール小侯爵ファンレーテン（第一等饗應役）是班牙國使節ラヘールジヤバト他洲領事務宰相某米里堅國使節パイキ上等評議役ヨレスゼ子ラールマヨールルスレイケン（饗應役）外國事務局書記官頭取マセル學士ホフマン（饗應役）ラチオピソン國王の内使某佛蘭西使節巴侖デラヒレスーレウキス勘定局宰相某英吉利國使節アントレウヒュカナン下院の筆頭ファンレーテン其次も即ち先よ載せさる比利時の使節ぶり

此馳走も實よ善を盡し美を盡し諸事高貴ぶる賓客を請待する法よ適へり夫故事濟て後日本使節の滿悦せし由を外

國事務宰相より表向よ當樓の主人よ言傳へさり扨又右饗應の間よ音樂初まりボトコルセキ氏の指揮よて儀式の曲を奏せり此日天氣も十分ふらされとも樓下より築山よ至るまて夥〳〵群集せり其後退散の少〳以前凡第九時頃よ日本使節甚奇麗ふる着服よて座を立ち居合せさる小兒婦女子等よ向ひ例の愛敬よき口上よて手を握り且所持〳〵る菓子を與へさり其後日本使節を始め其他の諸賓客も皆其家よ歸る

右馳走の指圖役を勤め勝れさる手柄を顯せ〳も外國事務書記官頭取マセル及び海牙の掟役巴侖ソイレンの二人ふり四人の日本使節及び其下役等の喜大方ふらず殊よ海軍宰相并よ其屬官と俱よ築山の上よ登り〳頃よも一〳〵快豁の色を顯せ〳其時右築山よ居さる多くの人と交りまさ小童等よ親〳〵みよ其小童等も花を採りて日本使節よ贈れり此感會よ使節の始め來り〳も第六時頃よて歸り〳も第九時半の頃ふり其道筋來り〳時も新道を通り歸り〳節よも古村古道を經さり其節見物の群集最も夥〳〵殆と往來も出來ぬぢりふり右の通りよて諸事首尾よく事濟めり

海軍事務宰相祝宴の事

同月二十四日（我五月廿七日）海軍事務宰相カッテンデイキ立派なる晩食を設け日本使節を招きさり其客亭の庭上よて美麗なる花枝を飾りしく數多の鏡の光と硝子燈の光とよ相映して總體甚盛なる景色かり又庭中よた漢土風よ造りさる宮殿ありて見事よ燈を耀し其中よて軍中よ用ふる音樂を奏せり其他庭中一體の摸樣極て風致あり凡第十一時頃より饗宴相始り日本使節并よ其饗應役外國局諸役人諸宰相及ひ其他の重き役人貴人等夥しく集會せしり此時居合せさる貴婦人の裝ひ殊よ目覺しうして日本使節も右來會の諸人と極めて懇切よ相親しみ時刻過て後旅館よ歸り其余の衆客も猶暫の間殘りさり

右同日饗應の以前よ日本の使節等官府の金銀工作場よ往きさり此工作場もホールスコーテンといふ所よ在りてイムファン・ケムペン氏よ屬せしかり其節往來の道筋よも日本國旗と和蘭國旗とを多く立列らね又其住宅の樓上よも奇麗なる花枝を飾れり日本使節右住宅よ暫時休息の後工作場の内よ誘れ其處よて金及び銀の荒金よて色々の肝要なる試驗をなし又も純精の金銀よて種々巧妙なる細工を爲す所を見さり右工作場の内よ留まること一時ばかり過て元の住宅よ來り又暫く休息せり其時後日の記念（カタミ）よとて巧

みゝ造りさる國王の半身像を贈れり右像は金地ゝ銀ゝて模様を顯せ〜其上ゝ浮字ゝて和蘭王維廉第三と書き裏の方ゝも謹仰日本國帝之大命千八百六十二年とぞ書きけゝ其次ゝ又ニコラ氏フーシリン氏コ氏の蒸氣仕掛の粉挽車を見物の爲ゝゲーストブリュフゝ誘もれさり其節當處の役人留守中ゝ付フールヒュルフ村の役人待請をゝ〜右工局附の役人案内をゝ〜さり日本使節右仕掛ゝて挽きさる粉の精良雪白ゝ〜て細密ゝる事と又其諸事の速ゝるとゝ感服〜殊ゝ其粉の詰御〜の巧みゝるゝ驚けり此饗應役の諸人日本使節と姑く懇切ゝる話を爲〜此迄日本ゝ此の如き粉挽車も勿論極めて手輕き仕掛さへゝ之ゝきとを知れりきれど日本ゝも粗末ゝる粉ゝらでもゝきと見へさり故ゝ日本使節右仕斗見物中此の如き仕掛を拵立る爲ゝ入用ゝる書物を得さきゝ〜を云出さり凡一時許の間工局見物〜其後暫時休息〜て歸れり

安特堤府遊覽の事

第六月二十五日（我五月二十八日）第十一時半の頃ゝ日本使節安特堤の蒸氣車立場ゝ到著す掟役ブローヒュル・アンヒルゝを誘引〜兼て定め置さる休息所ゝ赴きけれど當所の役人此所ゝ出迎へ〜り夫より用意の車ゝ乘〜ゞ當所の役人を第一等

の使節と乘合夫より順序よ從て次弟よ乘さりフラックと名
くる旅亭よ姑く休息し其後コステル氏の玉細工所よ赴き
夫より耶蘇教の徒の立置さる幼院を見物し次よ手遊屋の
店へも一寸立寄り夫より一旦先旅館へ歸り凡第六時半頃よ
再ひ車よ乘り國王の館を見物の為よ出掛さり日本使節の
到る所いつとよても見物人夥しく群集し旅亭の前ふども
宛も圍を請くるゝ如く殊よ日本人窓より顔を出し見物の
者よ會釋ふどし色〻の品物および小錢等を擲與へし時も
此群集殊よ甚しゝりき扨國王の館を一覽しクウベルとて
屋根の高き所よ登りふどし夫よりオウデケルキと稱する
寺よ詣て其後カルフルスタラートといふ町を通り第八時
半頃よ旅亭よ歸る

同二十六日（我五月廿九日）國用造營場よ到り夫よりオラニイ・ナス
サウと號くる兵卒の屯所を一覽し次よフリッシンゲン氏ジュ
ドクファン・ヘール氏の工局を訪ひしよ朝食の馳走あり夫よ
りボイクスローテルと稱する運上所よ到りけれも此所の
ヒュルステノウといへる廟所よて朝の音樂を爲せり
夕方よかりて和蘭貿易會所よて食事を爲せり此處も兼て
待請の爲よ立派よ飾付け庭よも燈を耀かし且其内よ美麗
なる小亭を設けスチュムプ氏の音曲を樣〻よ聞かしめり右